

(1) 成果

- ① 「ゲストティーチャー」や「見学」、「体験活動」など具体的な活動を単元に位置づけることで、主体的に学習に取り組む姿が見られた。

学校での水の使われ方を調べた活動では、自分たちが知っている他にもあるかもしれないという意識で、場所を班ごとに分担して調べ活動を行った。普段、あまり意識していないことを改めて調べてみることで「こんなところにもあったのか」と再認識したり、全く新しく見つけ出したりしたところもあって、発見する楽しさを味わいながら活動をすることができた。

また、自分たちが1日に使っている水の量の学習では、1人あたりの量についてバケツを見ながら考えてみることで予想もしやすくなり、実際の量を並べてみることでその多さを実感することができた。

浄水場の見学では、施設内を歩きながら汚れている水がだんだんきれいになっていく様子を見たり、中央監視室や水質検査室などの役割の話の話を聞いたりすることによって、より深く理解することができた。

地震で壊れた水道管の復旧を取り上げた学習では、ゲストティーチャーの方に来ていただいて、そのときの様子や復旧までの流れをお話してもらった。ゲストティーチャーの方のお話には説得力があり、復旧までの努力や工夫をしっかりとつかむことができた。子ども達からの質問もいくつもあり、意欲的な学習の姿が見られた。

このように、具体的な活動を単元に位置づけることで、子ども達がより実感をもって考え、理解することが可能になったと考える。

- ② 前の学習で学んだことを生かし、「問題解決の見通し」をもったり調べたりすることができた。

学校での水の使われ方について学習した際、使用目的がわからないものについてどのようにしたら調べられそうかを話し合い、校務士さんに聞いてみることになった。校務士さんに教室に来てもらって子ども達から質問するという形をとった。子ども達が発見した「外の蛇口」については、学校園の水やり用であることが分かるなど、校務士さんとのやり取りの中で自分たちの問題を解決することができた。

このことから、子ども達の中では何か分からないことがあった時には、その社会的事象に詳しい方に聞いてみるという方法があることを学ぶことができた。

この経験を生かし、1人あたりの水の使用量が増えたのはなぜかを調べる学習では、家族や近所の人に聞いてみようという解決への見通しをもち、そして調べることができた。

また、水をきれいにするための努力や工夫について学習する場では、前小単元「ごみのしまつと利用」で学習したことを生かし、「設備面で何か工夫があるのではないか」、「クリーンセンターでは24時間交代でがんばっていたから、浄水場でも・・・」とある程度の見通しをもって見学に行くことができた。

既習を生かすことで、子どもたちの思考を支えることができる。また、そのような支援をしていくことが大切であることが分かった。

③ 子ども達が自分と社会的事象との結びつきに気づき、そこに疑問がもてるような「新たな事実認識」が加わった時、出来上がった学習問題は子ども達のものとなり、主体的に学習を進めていくことが分かった。

1人あたりの水の使用量の変化についての学習では、まず子ども達は自分たち一人一人が毎日たくさんの水を使いながら生活していることに気づいた。そこへ1人あたりの水の使用量の変化から、水の使用量が40年で約2倍に増えたという新しい事実が加えられたのである。今の生活を当たり前前に思っている子ども達にとっては、40年前は今の約半分の水でくらしていたという事実は、子ども達にとって大きな驚きであったのだろう。その「なぜ」「どうして」という思いが学習問題をつくる力になったり、その学習問題を「自分のもの」にしたりする効果を生んだと思われる。

また、子ども達が聞き取りで調べてきたことを出し合う中で、トイレやお風呂、洗濯など、生活のいろいろな場面で変わってきていることが明らかになった。子ども達がそれぞれで調べた事実から、学習問題に対するその子なりの見方・考え方を作り上げて、話し合いをすることができた。また、話し合いを通して自分が調べてきた以外の事実とも出会い、約40年前の時代のイメージをより豊かにすることができたと考えている。

このように、子ども達が自分と社会的事象との結びつきに気づくことが、問題を意欲的に追究していくベースとなり、そこへ矛盾や違い・変化を感じる新しい事実を提示することで、主体的な学習を促すことができたと考えている。さらに調べてきた事実を出し合う中で、考えを広げたり深めたりできるような発問や支援を行うことによって子ども達はより豊かに思考することができるようになるのではないかと考える。

(2) 課題

① 子ども達の思考が連続するような学習の展開を工夫する必要がある。

子ども達にとって身近な物や興味深い事例を学習材として取り上げたことで、子どもたちの意欲を引き上げることはできたが、次の学習に向かう際にうまく思考が繋がらない場合があった。学習ごとに事例を提示し、問題を作り解決するという流れであったが、子どもたちの様子を見ると自分から次を考えるというよりは、次は何が来るのか待っている様子が伺われた。

単元全体に関わるような学習問題を設定し、それを意識しながら個々の学習問題を解決していくようにして、子ども達が自分で単元の中でどこまでが分かって、まだ何が分かっていないのかを分かるようにするなど、より主体的に学習を進められるよう工夫する必要がある。

② 互いの考えを積極的に出し合い、考えを深めていく学習を行うために、子ども達に活動の目的をもたせるための手立てや工夫を行う必要がある。

1人当たりの水の使用量が増えたわけについての学習では、調べてきたことの発表はよくできたのだが、生活がどのように変わったかについては、考えの深まりが十分ではなかった。班での話し合いの場を設定したのだが、何のために班で話し合うのかという目的意識を十分に持たせないまま話し合いをさせたので、自分の考えは班の中で話すものの、そこで終わってしまったためであると考えられる。

一人一人が学習問題を解決するという目的意識をもちながら授業を行うことは大切なことである。更に個々の活動、例えば話し合うことによって意見をまとめるのか、或いは考えの数を増やすのか等、活動毎に子ども達に目的をしっかりとめさせることが大切である。

③ 子ども達の学習の様子をよりの確に見取るための方法を検討していく必要がある。

評価規準や単元の中での位置づけを設定して取り組んだが、評価という点で考えると、何をどのように評価するかについて更に検討を加えていく必要を感じた。

例えば、子ども達を書いたノートやワークシートの記述を評価する場合、評価規準では[A]と[B]の違いを明確にしてあるのだが、それを子ども達を書いた記述と対応させるときに、判断に迷うことがあった。何に注目して判断するのか、このことについては教師毎に考え方が分かれてくると思われるが、例えばある学習のある子のまとめを例に、評価の仕方を複数の教師で検討するなど、幅広く検討を加えることで、よりよい評価の仕方を考えていきたい。

④ より高い実践力を養っていくための工夫・改善が必要である。

よいよい社会をつくっていくためには、自分の生活の仕方を変えていくことが大切であるが、それに加えて、他に働きかけることも大切なことであるだろう。本単元では、自分の考えを発信することはしなかったのだが、児童集会で全校に呼びかけたりポスターを貼ったりするなど、より高い実践力の育成を意識した学習を検討することも大切であるだろう。